

《登場人物》

- ・ 僕／カタフチくん
- ・ 息子／隣人一／大臣A／友人A／少年一
- ・ 妻／隣人二／居酒屋の店員／友人C／少年二／女
- ・ 父／隣人三／大臣B／友人B／少年三／男

1

ある小さな町の細い道。盛夏。強い日差しに蝉時雨。
歩いてきた「僕」は離れたところにある家を見て立ち止まる。

僕 思い出した。あれはカタフチくんの家だ。むかしの田畑も裏の山も削られてピカピカの家が立ち並び、近所の家もリフォームしたり建て替えられたり。この風景はまったく変わってしまったけれど、あの家だけはむかしのまま。屋根の形も壁の色も、閉めっぱなしのカーテンの柄も。たった今まで、数歩前まで忘れていたけれど思い出した。

短い沈黙。

僕 もともとここはのどかな場所だけであの家はとくにシンとしている。ヒソソリと……例えば家の前に車が停まっていれば大人になった彼がいるんだろうとか、玄関先に小さな自転車があれば子どもがいるんだろうとか……けれども何も無い。そこで誰かが生活していることを示すものはなにもない。かといって庭の木や植え込みは……誰も住んでいなければ枯れてるはずなのに生き生きとしている。そう、それもむかしのままに。不思議だ。ヒソソリと家だけがそこにある。誰かはいらなくても誰かいるのか分からない。時間が止まってしまったらどうな……

妻の声 走らない！

息子が駆け抜けていく。そのあとを妻が追ってくる。

妻 え、なに？

僕 うん？

妻 (遠くの息子に)七歳の息子！ 止まって！ 車危ないから。(僕に)もうはしゃいじゃって。

僕 うん。

妻 走るのが早い。

僕 もう七歳だからな。

妻 (息子に)ちよつとそこストップ！ なにブーツとして。

僕 あれ。

妻 ン？

僕 家があるだろ青い屋根。カーテンが閉まっている。

妻 茶色の？

僕 カーテン。

妻 うん。

僕 カタフチくんってな。

妻 カタフチくん。

僕 小学校の頃、大の仲良しで。家にも遊びに行った何回も。

妻 あの家？

僕 けど中学生になってクラスも離れて、ほらむかしは中学校人いっぱいいたから、隣の小学校からもいっしょになって、一学年で9組とか10組まで。だからクラスが離れると顔を合わさなくなって遊ぶこともなくなつて。

妻 お義父さんも来るってよ。

僕 え大丈夫か。

妻 (後ろを振り返って)ほら。

僕 おーい！ おじいちゃんとほら！ 一緒に。

息子が駆けて戻って来る。

僕 (すれ違う息子に) おじいちゃんのボールとか持ってやって。
妻 ……大丈夫かな。

妻も息子を追って戻る。

僕 大学進学で実家を離れて二十年以上が経つ。この町に生まれて出て行くまでの時間より、妻や息子と生活する向こうでの時間が長くなり始めたのが一昨年のことだ。母を亡くしても父は気丈にしているけれど一人きりの生活は寂しいだろうとできるだけこっちに帰ろうとはするけれど頑張っても年に二回……この真夏と……

「僕」は空を仰ぐと冬になる。

木枯らしが吹き遠くから灯油の移動販売の音楽。息子が「僕」のそばを駆け抜ける。

僕 走らない！ 車来るよ！

「僕」はコートなどを羽織り改めてカタフチくんの家を見やる。

僕 あれ？

カタフチくんの家が新たに建った家に隠れて見えない。

僕 夏はただ通り過ぎるだけだった。それからしばらく時間が空いて冬。実家に帰省してまた公園へ遊びに行く道すがら、田畑と裏の山はさら

に削られて家の数が増えていた。カタフチくんの家は新しい家の向こうに隠れてしまっている……なくなった？ ……ああ、あれだ。

「僕」は少し移動してカタフチくんの家を見つけてホッとする。

僕 見えにくくなったけど、この前の夏と変わらない……カーテンは閉めっぱなし。けれども緑は生き生きとしている。シンとしている玄関。しばらく見ていれば誰か出てくるか……出てこない。

「僕」の父が追いついてくる。

父 なんぼしようと。

僕 あれ。

父 ン？

僕 ちよつと隠れてるけど小学校の頃の同級生の家。三十年くらい会っ
てないんだけど。

父 (前を見て) あれどこ行った。

僕 ン。

父 先行っちゃった。

僕 おーい！

父 おーい！

父と「僕」は息子を追いながら探す。

僕 七歳の息子はおじいちゃんの家が大好きで、夏にも行った公園はよ
ちよち歩きの頃からとても気に入っている。ここぞとばかりに駆けて
行ってあつという間に見えなくなってしまう。

父 あ、おった。(孫に) 川危かけん！ 落ちるばい！
僕 俺あいつくらの頃、友達と遊んでたよ。

父 この川でか。

僕 何人か近所の友達と。なかに降りて、ほらトンネルあるやろ。あのなかをずっと探検とかって。懐中電灯持って。

父 (孫に)そこで待っとかんねほら。

僕 僕らが子どもの頃「ドブ川」と呼んでいた用水路はこの道に沿って細く長く続いている。川に降りて歩けば途中で地下に潜っていく。スリルを味わっていたあの頃。そうカタフチくんもメンバーの一人だった。川から上がるとみんな泥々。カタフチくんはじゃあねと言って川の向こうにあるあの家へ帰って行った。小さくなったカタフチくんがあの家の扉を開けてなかに消えていく後姿、いまでもはっきり覚えている。

父 (「僕」が道を曲がろうとして)そこじゃなか。もう一つ向こうや角。

僕 こんな道いつできた。

父 夏来たときもあつたらうが。

僕 あつたつけ？

父 まだ通行止めやったかな。山削って家ばたくさん作って新しいとこたい。

僕 実家を出て公園まで僕が幼い頃はほとんど一本道だった。この角を曲がってしばらくいけば右手に大きなため池があつて、森がだんだん見えて来る。公園はその森の入り口にある。けれども二十年離れているうちにまるで変わってしまった。蟻の巣がまたたくまに広がるように、この小さな田舎町の道路があちこちに広がっている。

父 あれここじゃなかったかな。

僕 ここため池の反対側ばい。

父 あー間違つた！

僕 ほらあそこ。

父 おーい七歳の孫！

僕 公園で待ってな！

父 おつてよかつた。

僕 えそつち？

父 こっちの方が早う着く。

僕 また知らない曲がり角あるかもよ。

父 もうなかつた。

僕 えー。

父は先に行つてしまった。「僕」は引き返す。

僕 この前の夏は迷わなかったのに。一度迷うとすっかり分からなくなる……あれ？ こっち？ ……どこだここ。

父の声 おーい。

僕 あ。

「僕」は立ち止まる。

僕 グルッと回つてきたんだ。息子とおじいちゃんと公園へ向かつていたはずなのに僕ははぐれて……ここはカタフチくんの家。僕はその前に立っていた。

隣家の人がジッと「僕」を見ていた。

僕 あ、どうも。

隣人二 ……。

他の隣家の住人たちにもジッと見られていることに気づく。

僕 どうも……

沈黙。

僕 お出かけかな……

「僕」が立ち去ろうとすると駆け寄ってきた三人に捕まって引き戻される。

僕 え、え、……

隣人一 気になるんだろ。

隣人二 ずっと見ていた。

隣人三 あっちの方から。

僕 いやそんな別に。

隣人一 知ってるんだよ。

隣人二 わたしたちも見てたからね。

僕 え。

隣人三 あんたがこの家をあの道からジッと見ているのをわたしたちは見ていたんだ。

隣人一 気がつかなかった？

僕 あ、はい。

隣人二 見ているつもりで見られていた。

僕 僕が？

隣人三 何の用だ。

隣人一 空き巣だろう。

隣人二 やっぱり。

隣人三 警察に突き出してやる。

僕 違います違います！

隣人一 何が違うっていうんだ。

僕 いや僕は……

隣人二 「僕は空き巣じゃありませんよ」みたいな格好しやがって。

隣人三 そんなことでわたしたちの目を欺けると思ったか。

隣人一 馬鹿め。

隣人二 わたしたちはここに住んで四十年の

隣人一・二・三 ご近所さんだ。

僕 ご近所さんですか。

隣人三 いまどき世間は防犯カメラなんかで自分の身を守ろうとするんだらうけどな

隣人一 わたしたちにはまったく必要ない。

隣人二 わたしたちは空気の变化を感じ取る。

隣人三 あ、誰か来た。

隣人一 郵便配達か宅急便か保険のセールスか。

隣人二 空気を感じて外の様子を伺うんだ。

隣人三 (指をなめて障子に穴をあけ) こうやってな。

隣人一 だからこの人の家の障子は穴だらけだ。

隣人三 現代アートと呼んでくれ。

隣人二 そうやってわたしたちはこの近所の安全を守ってるのさ。

僕 あの、僕は違うんです。

隣人一 正月三が日を狙うんだ。

隣人二 帰省したり旅行に行ったり。

隣人三 留守にしてる家を探して。

隣人一 離れたところから。そうだろ！？

僕 この家に用があつて。

隣人二 はじめは離れたところから。

隣人三 留守っぽい家を見つけたら。

隣人一 こんどは近くで観察だ。

隣人二 雨戸は閉まっているか。

隣人三 カーテンは？

隣人一 郵便受けに新聞はたまっているか。

僕 お出かけなんですか。

隣人一 え。

僕 ここのお宅。

隣人二 ……そんなことは知らない。

隣人三 知るはずがないだろう。

隣人一 隣はなにをする人ぞ。

隣人二・三 (前のセリフの語尾に合わせて)ぞ。

隣人一 詮索なんかしたら。

隣人二 プライバシーの侵害だからな。

隣人三 知っていても知らんぷり。

隣人一 なにか事件があつても。

隣人二 「さあ最近はあんまり見かけることはなかったですね」

隣人三 「朝はご挨拶もよくしてらっしゃいましたし家族でね仲良くお

出かけしてましたよ」

隣人一 「まさかそんなことする人とは思いませんでした」

隣人二 はい出た。

隣人三 尋ね人のパターン。

隣人一 なんて初歩的な。

僕 ほんとなんです。

隣人一 だったら押してみなよ。

僕 え。

隣人一 一家の人に出てきてもらつてあんたの言うことが本当なら。

隣人二 なんの問題もない。

隣人三 よし押せ。

僕 いやけど。

隣人一 ほら押せない。

隣人二 警察警察。

僕 ちよつと待ってください。

隣人三 だったらほら。

隣人一・二 ほら！

「僕」は恐る恐る呼び鈴に手を伸ばした。

呼び鈴がなる。「僕」はしばらく待ってもう一度押した。

僕 いらっしやらないみたいですね、あれ？

隣人たちは消えていた。「ハイ」という声に続いて鍵を開ける音がする。妻が出てきた。

僕 え。

妻 なんだ。

僕 あれ？

妻 なに鍵忘れて行ったの。

僕 うん？

妻 え大丈夫？

僕 うん。

妻 七歳の息子！ お父さん帰ってきたよ。

僕 七歳の息子は？

妻 さあ部屋でゲームでもしてるんじゃない？ あ、(息子に)宿題したんでしょね。先にするって約束でしょ。

僕は玄関の内と外とをキョロキョロ見ている。

妻 いつもより早かったじゃない。

僕 そう？

妻 夕飯まだできてない。

僕 いいよいいよ。そんなに空腹空いてない。

妻 ちよつと宿題見てやって。

僕 え、あうん。

妻 えなに。

僕 いや、俺の家だなんて。

妻 なにそれ、ちよつと止めてよ。まだ若いんだから。

僕 うんうん。

妻 誰の家だと思ったの。

僕 いや……カタフチくんの……

妻 「カタフチ」？

僕 けど自分の家だった。

妻 大丈夫？ 仕事大変なの？

僕 玄関にあるピンポン押すやつ、いっしょなんだよ。

妻 そうなんだ。

僕 昭和の家によくあるタイプなのかな。

妻 カタフチってあれでしょ。実家の、昔の同級生。

僕 そうそう、そうなんだよ。

妻 連絡ついたの？

僕 いや連絡もなにも……してないよ。

妻 すればいいのに。

僕 え、どうして。

妻 気になってるんじゃないか。

僕 連絡先知らないもん。(呼んで)七歳の息子！ ちよつとおいで！

妻 そうそう、ねえ、ちよつとこれ見て欲しいんだけど。

僕 なに。

妻 物件。

僕 物件？

妻 いい物件あったら考えようって話してたでしょ。

僕 あったの。

妻 今日ね一日中不動産屋まわって探したの。

僕 ええっ！？

妻 いっぱいあったけどそこから三つに絞り込んだ。

僕 買う気マンマンじゃん。

妻 銀行にも。

僕 行ったの。

妻 来週の木曜日。有給大丈夫よね。

僕 いや大丈夫だけども、七歳の息子の小学校は？

妻 全部同じ学区の物件。

息子が現れて宿題のノートを叩きつけて出て行く。

僕 なんだよその渡し方は！ なに、え、怒ってんの七歳の息子。

妻 なんか機嫌が悪いのよ帰ってきてから。

「僕」はノートを拾って宿題を見る。

妻 お義父さんにも相談したの電話で。

僕 えそうなの。

妻 いいんじゃないかって。お義母さんいつも心配してたらしいよ。

僕 うんざりだったよ。

妻 いつまでも賃貸はダメだよつぱり中古でもいいから自分の家をちゃんと持っとかないとって。そのために遺してくれたお金使うなら天国のお義母さんも喜んでくれるだろうって。

僕 親父がそんなこと言ったの？

妻 うん。

僕 けどそれ一戸建ての話だろ。

妻 駅近くだったらマンションでもいいんだって言った。将来売るときも売りやすいからって。

僕 あこれ間違ってる。

妻 なに。

僕 漢字。これほら「頭」って漢字、全部「顔」って書いてある。おい！ ちょっと来てごらん。

妻 一番上のがわたしが一番。

僕 なにが。

妻 物件。書類。

僕 物件ねえ。

妻 ちよつと……やる気あんの？

僕 あるよあるある。マンション買うんだ。七歳の息子のためにもね。そうそう。

息子が不服そうに現れる。

僕 なんだよご機嫌ナナメだな。ほら、これ見てごらん。「頭」って漢字。

お前全部「顔」って書いてる、な。書き直し……だって違うじゃんどう見たって。「頭」と「顔」。

妻 ちゃんとやんなきゃゲームないよ。

僕 ほら。

妻 ご飯もできるからね。

僕 パツパとやつといで。

息子は不満そうにノートを持っていく。

僕 七歳の息子はいいの引越し。

妻 いいって。

僕 いいって？

妻 転校するわけじゃないしエレベーターのあるマンションの上の方だよって言ったらむしろ引越したいみたいな。

僕 はあ。

妻 今月末までに決めちゃわないと。大家さんにも言わなきゃだし。

僕 あいつ友達いるんじゃないの。
妻 え。

僕 友達。この近所に。よくいっしょに遊ぶような。

妻 近所には……学校にはいるだろうけどね。だって学童から帰ったらもう出かける暇もない。

僕 うん。

妻 だから転校するわけじゃないんだから。

僕 ああ。

妻 カタフチくんじゃないんだから。

僕 え。

妻 学校でいじめられて引きこもっちゃったんだってね。あなたが学校で最後に見かけたのが十五の春。離れたところの渡り廊下を青白く歩いていくやせてるカタフチくんが。背中を丸めて……こんな感じで歩いていた。声をかけようか（喉）まででかけたけど、のみ込んでしまった。カタフチくんは反対側の校舎に消えてしまった。黒い学ランが新入生のように輝いていたその背中を見送るだけのあなた。それからそのまま……そのまま三十年近く。

僕 引きこもってたというのは噂だよ。いじめられてたっていうのも。

息子が背中を丸めてノートを持ってきては置いていく。

僕は少し驚く。

妻 高校に進学してカタフチくんのことをすっかり忘れてしまったのは、引越したからって聞いたから。それも噂で？

僕 うん。

妻 あの夏の日、カタフチくんの家を見つけて、まだあったんだって。思い出しちやっただのね。

僕 ……。

妻 ザワザワした。

僕 え。

妻 そのまま忘れてしまってもいいことなのにカタフチくん。思い出し

てザワザワしちやっただ。

呼び鈴がなる。

妻 出て。

僕 俺？

妻 あハンコこっちにある。宅急便でしょ。

僕 どこ。

妻 こっち。

僕 あのさ。

妻 。

僕 カタフチくんのさ、渡り廊下の話ってした？

妻 しなかった？

僕 誰にも話してないと思うんだけどまだ。

もう一度呼び鈴がなる。

妻 宅急便。

僕 はーい……（扉を開けて）すみませんお待たせしま……あれ？

外には誰もいなかった。

僕 え？

「僕」が外を探すうちに「扉」がバタンと閉まる。「僕」は戻ろうとするが玄関の扉が開かない。

僕 あれ？ あれ？

「僕」はハツとして後ずさりする。

「僕」は周りの雰囲気は自宅とは違うことに気づく。

僕 違う。なんか違う。

「僕」はまた慎重に扉に手をかけるがやはり扉は開かない。

大臣Aの声 そんなことで扉が開くと思うのか！
僕 え。

大臣A 偏った見方で物事に臨めばその結果はやがてお前自身の信念を捻じ曲げて周りに不幸を撒き散らすことになる。明るいところばかりを見るんじゃない。暗いところにこそ目をこらせ。そうすれば隠された真実がそこにあることに気がつくだろう。すべてが運命だなんていうのは迷信だ。信念を強く持て。偏りのない見方ですみずみまで目をこらせ。そうしてこそ苦難の道は切り開かれる。この大きな扉も同じこと。いいか。

僕 はい。

大臣A 引くんじやない押すんだ。

大臣Aが扉を前へ押した。大きな音をたてて扉は開く。

大臣A この暗さはなんだ。王の間はたとえ夜であつても煌々と光にあふれている場所のはず。

僕 オウノマ?

大臣A 王はどこへ行かれた。誰かいないか！ 戦争の後始末を終えた王の忠実なる僕（しもべ）が帰ってきた。王は！ 誰か。

短い沈黙。

大臣A 誰もいないのか……おい。

僕 あはい。

大臣A お前は門番だな。なにか知っているか。

僕 え。

大臣A わたしがここを離れたのは三年前のことだ。戦争はなんとか終わったが勝ったも負けたもない。我が国も彼の国もあまりに多くの民が死にともて滅びるところだった。休戦の協定を話し合い国と国との境い目を決めるのがわたしの仕事。ここを離れる時、みな疲れ果ててはいたがやつと戦争が終わると安心していたはずだった。昼も夜も鳴り止まない大砲の音、赤く染まり続ける空、そんな長い日々がやつと終わって、空を舞うひばりの声も聞こえるようになった。そんな明るい兆しがこの部屋にも差ししてくる頃、わたしは交渉に出かけたのだ。それなのにどうだ。暗く沈んだこの部屋は。三年の留守のあいだにながかった。

僕 いや……僕には。

大臣A 誰かいないのか！

どこからかシートと声がする。

大臣A 誰だ。

大臣Bの声 神聖な場所に喧騒を持ち込むのは誰だ。

大臣A わたしは王に喜ばしい知らせを持ってきた。長い交渉の末に話はやつとまとまった。これで戦争は終わりだ。さあ王はどこに行かれた。

大臣B 喜ばしい知らせなどあるものか。この国にはいつも悲しみしかない。いつときの喜びもすぐにそれ以上の悲しみに飲み込まれてしま

大臣A 戦争は終わったではないか。

大臣B 大砲の弾を抜き、剣をさやに収めればそれで戦争が終わったと

思ったか。めでたい奴だ。

大臣 A どういうことだ。

大臣 B 建物が壊されて人の命が奪われて何もかもが失われた。たしかにそれ以上に失われることはない。しかしだ。残された人々は途方に暮れて失われた悲しみと怒りに打ちひしがれている。一度失われたものを回復するにはとても長い時間がかかるのだ。

大臣 A それでも明るい兆しが消えて無くなったわけではない。

大臣 B まだ世界は喪に服している。たとえ明るい兆しがあるうとも人々はまだ顔を伏せて暗闇を見つめたままだ。

大臣 A 王は？

大臣 B あそこだ。

大臣 B は王が籠る部屋を指さす。

大臣 A あの扉の向こうにいるのか。

大臣 B 大切な王子を戦いで亡くしてお妃さまも行方知れず。お前がここを離れた頃からずっとあの部屋をでていらつしやらない。

王の部屋に近づこうとする大臣 A を大臣 B が止める。

大臣 B ダメだダメだ。近づいていいのは食事やお召し物を取り替える給仕の者だけ。

大臣 A どうして。

大臣 B 長年使えた忠実な僕ですら、部屋へ入ることはもちろん近づくことすら禁じられている。ここまでだ。(床を指して) 見てみるほら赤い線が引かれている。

大臣 A 誰が決めたそんな理不尽な決まりごとを。

大臣 B 口を慎め。王ご自身が決められたことだ。

大臣 A いったい王に何があったのか。

大臣 B それは誰にも分からない。底の見えない絶望のなかにまだいるのか、あまりの悲しみゆえにさんと陽が差すこの世界の輝きがまだ曇って見えるのか。

大臣 A ご病気ではないのか。

大臣 B 量は少なくともお食事はとっておられる。

大臣 A 食事をとっておられるからと言って病気でないとはいえないではないか。

大臣 B そうではないと信じるしかない。

大臣 A わたしが言うのは……そうじゃない、お心の、

大臣 B おい！

大臣 A ……

大臣 B それ以上は口にするな。王はつねに民と国の未来を照らす光。

いまはただ静かに過ごされているだけだ。戦争も終わりやつと民の生活も立ち直ってきた。王はつねに民と国の行く末を見守り祈っていらつしやるのだ。

大臣 A 三年ものあいだか。

大臣 B そうだ。

大臣 A ずっとこのお部屋のなかでか。

大臣 B ……

大臣 A (大臣 B を振り払おうとして) けれどもわたしは報告せねばならぬ。

大臣 B (大臣 A を止めて) 無駄だ。どんなに呼びかけてもその声は硬い扉に跳ね返され虚しくこだまするだけ。

大臣 A お前の役目はどうした。忠実なる僕。王の側に常にいてお助けするのがお前の仕事だろう。

大臣 B だからわたしは！ ……いつ王が部屋から出ていらつしやってもいいようにここにずっと控えているのだ。

大臣 A こんな暗く沈黙に包まれた場所？

大臣 B わたしに光があたる必要はない。

僕 カタフチ……

大臣A え。

大臣B いまなんと言った。

僕 カタフチくん。

「僕」は二人を振り切って扉を開けた。

「僕」はフラフラと王の部屋の扉に向かう。二人の大臣は慌てて「僕」を引き止める。

大臣A おいおいおい。

大臣B 門番ごときが王の名を軽々しく口にするんじゃない。

僕 渡り廊下でばったり会った時、カタフチくんは驚いて、僕も驚いて、無言で見つめあった。それはきつと一瞬のことだったけど、お互いに驚いてカタフチくんは何も言わずに目を伏せた。目を伏せるのと同時に歩き出したんだ。渡り廊下の向こう側、薄暗い校舎のなかにスッと消えていった。僕はそこで何か声をかけるべきだったんじゃないか。なんでもいい。ちよつとしたことでいい。声をかけるべきだたんじゃないか。

大臣A お前ごときになにができる。

僕 あの時期、学校はいじめがひどかったから、毎日が戦いのようだった。誰かをいじめる側に立っていないと自分がいじめられてしまう。カタフチくんもきつとそんな戦いのなかで打ちひしがれていたに違いない。

大臣B 王の悲しみは誰にも分からない。その絶望はどここの海よりも深く光の届かないところにある。

大臣A 思い上がるんじゃない。誰の手にも追えない痛みにも何も知らない何も関わりのないお前になにができる。

大臣B その扉に触るな。

大臣A 誰か！ こいつを引っ張り出せ！

大きく重いはずの扉なのに「僕」が手をかけると軽々と開いた。
カランカランとドアベルがなる。

店員の声 いらっしやいませー。

そこは「僕」の地元にある居酒屋になる。

店員 (現れて) 何名様ですか。

僕 え。

店員 お一人さまですか。

僕 ここは……

店員 お一人さまご案内です。カウンターへどうぞ！

友人A 三人三人！

店員 (店の奥に向かって) 三名様ご案内です。

友人B (店員に) お姉ちゃん入れたら四人たい。

友人A なにバカなこといいよつとか。ごめんね。

店員 上着お預かりしますね。

友人B ほら。

僕 え。

友人B 上着って。

僕 あ、うん。

三人は上着を脱いで店員に渡す。店員は去る。

友人B なんで半袖と？

友人A ダウンは薄着の上に着るとぞ。

友人B 寒かろうもん。

友人A あこいつ分かつたらん。なあ。

僕 え。

友人B なんがや。

友人A ダウンはな人の体温で暖かくなるとよ。中に服着とつたら熱が
ダウンに伝わらんで意味がなくなるったい。これが正しい着方。やろ？

僕 あ、まあ。

友人B けど脱いだら寒かろうもん。

友人A 店んなかは暖かいけん。

店員 (戻ってきて) おしぼりです。

友人B なんば飲む。

友人A おれ生。

友人B 生でよか？

僕 え。

友人A 生。飲むもん。

僕 うん。

友人B 生三つ。

店員 (店の奥に) 生三つ！

店員が去る。

友人A 姉ちゃんじゃなからうもん。

友人B なんが。

友人A そんな若くもなからうもん。

友人B そげん意味で言つたつちやなか。

友人A どうかしたら同じくらいじゃなかや。

友人B えー。

友人A メガネばしとうけん若く見えるったい。

友人B けどほらお尻が。

友人A お尻？

友人B ほらこう……

友人A そげんこと言いよつたらセクハラち追い出されるばい。

友人B 別に触ったわけじゃなかとに。

友人A 言うだけでバツつたい今時は。なあ。都会はそうやる。

僕 あ、まあ。

友人A 店員さんはよかけん食べもんは。

友人B なん食べたいと。

僕 いや別に。

友人A 久しぶりに帰ってきたつちやけんね、なんか……けど普通のも
んばっかやな。

店員 (戻ってきて) 生三つです。

友人B 注文いいですか。

友人A えーつと。なんでもよかや。

僕 あ僕は。

友人B 適当に。

友人A だし巻きと唐揚げ、ブリの造り。

友人B よかね。

友人A 焼き鳥の盛り合わせ。これね六本のやつ。塩で。

友人B 他は。

僕 あ、もう。

友人B じゃあお願いします。

店員 だし巻きと唐揚げ、ブリの造り、焼き鳥盛り合わせを塩でよかつ
たですか。

友人A (店員に) ねえねえ。お姉ちゃんいくつ。

店員 え。

友人B なんば言いよつとか貴様(きさん)!

友人A え、なんかもしかしたら同級生じゃなかかって、な、どこ中?

西中?

友人B ここで働きよつたつて西中かどうか分からんめえもん。馬鹿か。

友人A ばってんほら。

友人B ごめんねもういいけん。

店員は奥へ行った。

友人A なかなかシヤイツちやね。

友人B なんば言いよつとか。

友人A 男ばっかじゃつまらんめえもん。

友人B よかったい今日は。ほら乾杯。

友人A ではでは。明けておめでとうございませう。

友人B 今年もよろしくお願いします。

友人A・B 乾杯!

乾杯をしてジョッキをおおる男たち。

友人A かーつ。

友人B うまい。

友人A すみませーん、生もう一杯。

店員の声 生一つ!

友人B はやつ。

友人A 待つのがイヤと。リズムたいリズム。

友人B いつまでおると。

僕 え。

友人B こつち。

僕 え……明日。

友人A 仕事?

僕 そうそう。

友人A 忙しいと?

僕 まあ。

友人B ブラックばいブラック。

友人A 忙しかだけでブラックじゃなからうもん。

友人B 残業も多いっちゃろ。

僕 最近はだいぶましだけど。

友人A こんど部活のみんなが集まろうって話ばしようっちゃけど。

僕 みんなで。

友人B 三月入って。

友人A 佐々木先生の三回忌。

僕 佐々木先生？

友人B あんましたくさん人集めよったら大ごとになるけん、俺らの代

から二つ上までくらいでこじんまりとやろうかって言いよったい。

友人A 一応日曜にしようかって話ばしよっちゃけどくさ、

友人B 大丈夫？

僕 俺？

友人A 三月。

僕 うん、ま、ちょっとスケジュール見て。

友人A 人集めとか場所とかは俺たちがやるけん

友人B そうそう。

店員 生一つお待たせしました。グラスいただきます。

友人B ハイボール一つ。

店員 (去りながら店の奥に向かって) ハイボールです。

僕 あ！ 佐々木先生ってあれやる国語の。

友人A 国語？

友人B 数学ばい。

僕 ああ数学か、そうそう数学数学。担任のね佐々木先生。

友人A いやいや。

僕 え。

友人B クラスはバラバラやったる俺ら。

友人A お前なんかちよっと具合悪いか？ 元気なかやん。

友人B 佐々木先生。顧問やん。

僕 顧問。

友人A まああとは部長たい。

友人B 部長が来んと格好つかんけんね。

僕 部長って？

短い沈黙。

友人B もう酔った？

僕 いやまだ。

友人A・B カタフチやろ。

僕 え。

友人B 我らが西中演劇部の部長やん。

僕 演劇部？

友人A 三十年前ばい卒業公演。

友人B (「僕」に) あれ？ 何の役やった？

僕 ん？

友人B 卒業公演。

僕 卒業公演。

友人A 俺らの。

僕 あ……うん……

友人A 出とった？

友人B 出とったやろ。

僕 ……かな。

友人A 連絡つかんたい。

僕 え。

友人B 東京行っただって聞いたんやけど。親御さんも違うところ引越

して。

友人A カタフチ。

友人B 大学で行ったんかな。

友人A 就職じゃなかや。

僕 カタフチくん？

友人A そうそう。

友人B なんか知つとう？

僕 あ、いや。

友人A やっぱ部長がおらんと締まらんばい。

友人B うんうん。

「僕」は立ち上がる。

僕 ちょっとトイレ。

友人B 大丈夫や？

僕 うん。

店員 (現れて) 唐揚げです。

僕 トイレは。

店員 突き当たりを曲がったところです。

「僕」はトイレへ向かう。その距離が思ったよりも長く、居酒屋の喧騒も背後に消えていく。歩き続ける。

僕 カタフチくん……演劇部……部長？ だって部活どころか学校にも……あれ、どこ？

なにもない廊下の突き当たりに「僕」はトイレの扉を見つける。

僕 トイレ……ドアだ。

ドアノブに手を伸ばして「僕」は気づく。

僕 これを開けるとまた変なことに……

「僕」は慎重にドアを開けた。

僕 トイレだ。

ホッとした「僕」は洗面台の前に立って蛇口をひねり顔を洗う。スボンのポケットからハンカチを出そうとするがなかった。

僕 あーハンカチ。

手と顔を濡らしたまま「僕」はトイレを出て戻ろうとする。居酒屋の喧騒が戻って来る。誰かがカラオケで歌っている。

店員 (現れて) タオルどうぞ。

僕 あ、すみません。

「僕」が受け取ったタオルにはマイクが包まれていた。

僕 え、なに？

店員 あれです。

僕 は。

店員が差したのはカラオケのモニターだった。

僕 (画面を読んで) 「武田鉄矢、少年期」

曲が始まる。困惑する「僕」は曲のイントロが終わる頃に思い出す。

僕 小学校の頃、ドラえもんが大好きで意気投合したんだった。カタフチくんはドラえもんの長編映画で歌われた武田鉄矢の「少年期」がすごく気に入って武田鉄矢のファンにもなった。歌手の武田鉄矢が金八先生を演じていて生徒のオーディションがあることを知ったカタフチくんは

友人A 中学生になったらオーディションを受けたいと言った。

友人B そのために演劇部。

僕 演劇部？

店員 俳優目指すなら演劇部ですからね。

僕 入ったの？

友人A それは分からない。

友人B 分からない。

僕 だいたい僕は陸上部に入った。演劇部じゃない。どうして演劇部の人みたいになってるの。

店員 そりゃカタフチくんはいっしょに演劇部に入って欲しかったんでしょ。

僕 は。

友人A お前といっしょに演劇部に入って

友人B 金八先生に出たかったんだよ。

店員 きつと。

僕 そんな話聞いてない。

友人A 言わなくなっちゃって。

友人B わざわざ。

店員 目を見れば分かるでしょ。

僕 目？

友人A 友達なんだから。

友人B 親友なんだから。

僕 そんな分かるわけないじゃん。目を見ただけで演劇部にいっしょに

入ろうとか。

友人A だって友達なんだから。

友人B 頼まれてもないのにドラえもん貸してくれたじゃないか。

僕 じゃあカタフチくんは一人で演劇部に入ったって？

短い沈黙。

僕 俺が知らないところでカタフチくんがどうしてたのか、知ってるんだろ。教えてくれよ。

短い沈黙。

僕 ちよつと待てよ。ストップ。

曲が止まる。

僕 演劇部はない。なかった。西中に俺たちがいた頃はなかった演劇部。

居酒屋の喧騒が戻る。

僕 すまん、ちよつと今日は。

友人A え、なんで？ もう？

友人B まだ唐揚げしかきてないばい。

僕 ちよつとやっぱり具合が悪かみたいで……(財布からお金を出して)これ適当やけど。

友人A よかよこんなに。

友人B 大丈夫か。

僕 すまんせつかくなのに。

友人A じゃあ

「僕」は店を出ようと扉を押すが開かない。

僕 あれ

友人B 押すっっちゃなくて引かんば。

僕 あそうか。

店員 お客さん上着！

僕 ああ。

友人A そのまま出たら風邪引くばい。

友人B どんだけ慌てようとや。

僕 ……。

「僕」は上着を着る。

友人B 元気でな。

僕 また。

友人A カタフチの連絡先分かったら教えてくれ。

僕 うん…。

「僕」は扉を開いた。

「僕は」木枯らしが吹く冬の夜道を歩いている。遠くに拍子木の音が響いている。

僕 じゃあカタフチくんはなに……えっと……東京で役者さんをしてるってこと？

「僕」は再びカタフチくんの家の前にきた。

僕 いつのまにかまたカタフチくんの家。僕はなにをしてるんだろう……夜の部屋に明かりは一つもついていない。正月なのに……正月だからか……（風が吹いて）寒っ……

拍子木の音とともに隣人たちが近づいてくる。

隣人二 火の用心！

隣人一 あ。

僕 あどうも。

「僕」が立ち去ろうとする と駆け寄ってきた三人に捕まって引き戻され懐中電灯で顔を照らされる。

隣人三 あんたはこの前の。

僕 え。

隣人一 やっぱりね。

隣人二 やっぱり。

隣人一 正月三が日を狙うんだ。

僕 いや違うんです。

隣人一 何が違うっていうんだ。

僕 いや僕は……

隣人二 「僕は空き巣じゃありませんよ」みたいな格好しやがって。

隣人三 そんなことでわたしたちの目を欺けると思ったか。

隣人一 馬鹿め。

隣人二 わたしたちはここに住んで四十年の

隣人一・二・三 ご近所さんだ。

僕 お久しぶりです。

隣人三 いまどき世間は防犯カメラなんかで自分の身を守ろうとするんだらうけどな

隣人一 わたしたちにはまったく必要ない。

隣人二 わたしたちは空気の変化を感じ取る。

隣人三 あ、誰か来た。

僕 ああ！ ああ、すみません。その話はこの前も。

隣人三 現代アートと呼んでくれ。

僕 障子の穴ですよ。

隣人一 なにしてるんだこんな夜遅く。

僕 いやどうしてか僕にも。

隣人二 酔っ払ってる？

隣人三 飲んでばっかりだな！

隣人一 いい気なもんだ。

隣人二 こっちは町の安全を守っているというのに。

隣人三 こんな真冬の寒い夜に。

隣人一 小学校の同級生だって言うんだろ。

僕 え。

隣人二 はい出た。

隣人三 尋ね人のパターン。

僕 ほんとなんです。

隣人一 だったら押してみなよ。

僕 この前もそれで押してみたけど、あの、誰も出なくて。

隣人一 家の人に出てきてもらってあんたの言うことが本当なら。

隣人二 なんの問題もない。

隣人三 よし押せ。

僕 部屋の明かりもついてませんしこんな夜遅くに。

隣人一が呼び鈴を連打する。

僕 あ。

隣人一 こんばんは！

隣人二・三 こんばんは！

僕 いやもういいんです。あのすみません……

隣人一 留守かな。

隣人二 誰が住んでるんでしたっけ。

隣人三が勝手にドアノブに手をかけると扉が開いた。

隣人三 開いてる。

隣人二 お邪魔します。

隣人一・三 お邪魔します。

僕 いや勝手に。ご近所さんだからって。

隣人たちは扉の向こうへ入っていく。

隣人一 隣はなにをする人ぞ。

隣人二・三 (前のセリフの語尾に合わせて)ぞ。

隣人一 詮索なんかしたら。

隣人二 プライバシーの侵害だからな。

隣人三 知っていても知らんぷり。

隣人一 なにか事件があっても。

隣人二 「さあ最近はある見かけるとはなかったですね」

隣人三 「朝はご挨拶もよくしてらっしゃいましたし家族でね仲良くお出かけしましたよ」

隣人一 「まさかそんなことする人とは思いませんでした」

隣人たちの姿は消えて「僕」が玄関前に取り残された。

僕 勝手に人の家に入っちゃダメだろご近所さん……すみません！ ……

…空き家なのか。だから生活感がなかったのか……そうかさりやそうか。

僕は家のなかを覗き込む。

僕 カタフチ君の家に遊びに行ったのは……何回だろう二、三回……この

の玄関をくぐって、けれどももちろんこんな夜じゃなかったから、そもそも家のなかがどんなだったか覚えていないし……

僕は周囲を見回してそと家のなかに足を踏み入れる。

僕 こんな椅子があった。こんなテーブルがあった。こんな電話台があった……全然覚えていない……

ゴウゴウと水が流れる音がする。

僕 なんだろう……

「僕」は音に引かれて前へ進む。そこは「僕」の実家の近くにある

用水路のトンネルの中だ。

僕 この暗いのはいったい……

数歩歩くと足元が水に浸かっていることに気づく。

僕 水浸しだ……ここは……どこ。

少年二の声 おーい。

少年一の声 おーい。

少年三の声 おーい。

僕 おーい。

少年二 (懐中電灯を持って現れて) いた。

僕 え、あ。

少年二 危なかよさつさ行きよつたら。

僕 僕？

少年二 おつたよ！ ここ！

少年一の声 どこ？

少年二 ここたいここ！

少年三 あっちじゃなかや。

少年一と三も集まってくる。

少年一 おつたおつた。

少年三 なんぼしよう。

少年一 戻ろうか言いよるとに。

僕 戻る？

少年二 ここまで来たたら戻るよりも先行つた方が早いっちゃやない？

少年三 なんかあつたん。

僕 いや……よく分からん。

少年二 ほら行くばい。

少年一 戻ろうや。

少年三 そげん言うんやつたら一人で戻り。

少年一 え。

少年二 ほら！

僕 僕らは水浸しの……用水路のトンネルをジャバジャバと音を立てな

がら前へ進む。

少年一 どっち？

少年二 こっち。

少年一 ほんとに。

少年三 間違つとつたら戻ればよかたい。

少年二 そうそう。

少年一 もう一度つけてみんね。

少年二 どうして。

少年一 少し休ませたら電池復活するとよ。

少年三 復活とかしないって。もう切れとっちゃけん。

少年一 試してみらんと分からんめえもん。

少年三 じゃあやってみ。

少年らは懐中電灯のスイッチを入れるがつかない。

少年三 ほら。

少年二 怖いと？

少年一 怖いことなかばつてん危ないやん。

少年三 怖いとばい。

少年一 怖くない。

少年二 ほらじゃあゆつくり行こ。服引つ張つてよかけん。

少年らと「僕」はトンネルのなかを進む。

少年一 ジャバジャバ。

少年二 ジャバジャバ。

少年三 ジャバジャバ。

僕 懐中電灯の電池が切れるというアクシデントに見舞われた僕らは真
っ暗ななかを

少年一 ゆっくりばい。

僕 進んでいった。

少年二 ちよつと服引つ張りすぎ。

僕 僕は誰かの服の端をもち、後ろの誰かも僕の服を引つ張っている。

少年一 ジャバジャバ。

少年二 ジャバジャバ。

少年三 ジャバジャバ。

僕 水はふくらはぎのところまで。今日は遠出してみようといつもより
用水路のトンネルを遠くまで行こうとして

少年二 お前が言ったつちやろ。

少年三 俺じゃないもん。

少年一 え、誰？

少年三 だいたい懐中電灯の電池がなくなるけんいかんつたい。

僕 トンネルのなかを迷ってしまった。意気揚々と進んでいた子どもの
僕らはあつという間にビビって、

少年一 あ。

少年二 なに。

少年一 水が入ってきた長靴んなか。

少年二 なんで。

少年一 分からん。

少年二 たぶんこっちの方。

僕 前の人の服を引つ張り引つ張られるこの感覚が僕らの信頼をつない
でいた。

少年一 ジャバジャバ。

少年二 ジャバジャバ。

少年三 ジャバジャバ。

僕 ドラえものの映画見に行く？

少年一 ドラえもん？

僕 明日から始まるやろ。

少年二 当たり前やん。

少年三 見に行く。

少年一 俺も。

少年三 テレビでCM見たつちやけどき。

少年一 見た見た。

少年二 歌がいい。

少年三 あれ好き。

少年一 好き。

少年二 あれ武田鉄矢っていうとばい。

少年三 誰それ。

少年二 歌ってる人。

少年一 へえ。

僕 思い出した。ドラえもんの話を初めてしたのはこのドブ川のトンネ
ルの中だった。夏休みにドラえもんの長編映画が始まるって、初めて
聞いた武田鉄矢という名前があつた。暗なトンネルのなかをこだまし
たんだ。そうだ、このなかにカタフチくんがいる。いっしょに
るんでよく遊んでいた頃のカタフチくん。前のこの子か、後ろの誰か
か。

少年二 あ！

少年らが向かう方から光が差ししてくる。

少年一 出口や。

少年三 外に出られる。

僕 遠くにぼんやりとしていたけれどあれは光だ。トンネルの出口。

うどだけ歩いたことか、やつのことで、

少年二 あんまり急いだらこけるけん。

少年一 ジャバジャバ。

少年二 ジャバジャバ。

少年三 ジャバジャバ。

僕 歩くスピードが上がる。水をかき分ける音がどんどん大きくなる。

少年二 服、放したらいかんよ。

少年一 おしっこしたい。

少年三 おしっこ？

少年一 ずっと我慢しとつたと。

少年三 もらすなよ。

光とともに蟬時雨の音。

少年一 もうすぐ！

ついに少年らは外へ出た。強い夏の日差しに顔を背ける。

少年二 まぶしい！

少年三 うわっ！

僕 強い夏の日差しに僕らは顔をそむけた。

少年三 ここどこ。

少年二 元のところたい。

「僕」は川のなかで転ぶ。

少年一 ちょ、大丈夫？

少年三 びしょびしょやで。

少年二 カタフチくん。

僕 え。

少年一 カタフチくん。

少年三 カタフチ。

僕 僕？

少年一 立てる？

僕 カタフチくん？

少年三 俺じゃなかよ。

少年二 怪我したと。

少年一 はい。(と手を差し出す)

僕 カタフチくんて誰。

少年三 記憶喪失や。

少年二 「キオクソウシツ」？

少年三 頭強く打ったり宇宙人に会ったりしたらなるやつ。全部忘れる

少年一 名前分からんと。

僕 あ、僕？ えっと……

少年二 カタフチばい。

少年三 カタフチ……なに？ 下の名前。

少年二 知らん。

少年一 お母さん呼んだ方がいっちゃんないと？

少年三 頭痛い？

僕 あ、いや大丈夫。

少年二 家どこか分かる？

少年一 自分ち。

僕 うん……

少年三 あればい。

僕 え。

少年一 あれ。

少年二 あそこにあるやろ。青い屋根。

少年三 茶色いカーテン。

少年一 あれさ、なんでいつも閉まっとうと。

僕 あれ？

少年たち ほらあれ！

少年たちは離れたところにある家を指差した。

ある小さな町の細い道。盛夏。強い日差しに蝉時雨。
歩いてきた男は離れたところにある家を見て立ち止まる。

男 思い出した。あれはカタフチくんの家だ。むかしの田畑も裏の山も削られてピカピカの家が立ち並び、近所の家もリフォームしたり建て替えられたり。この風景はまったく変わってしまったけれど、あの家だけはむかしのまま。屋根の形も壁の色も、閉めっぱなしのカーテンの柄も。たった今まで、数歩前まで忘れていたけれど思い出した。
女の声 走らない！

子どもが駆け抜けていく。そのあとを女が追ってくる。

女 え、なに？
男 うん？
女 (遠くの息子に)七歳の息子！ 止まって！ 車危ないから。(僕に)もうはしやいじやって。
男 うん。
女 走るのが早い。
男 もう七歳だからな。
女 (息子に)ちよつとそこストップ！ なにポーツとして。
男 あれ。
女 ん？
男 家があるだろ青い屋根。カーテンが閉まっている。
女 茶色の？
男 カーテン。
女 うん。
男 カタフチくんってな。
女 カタフチくん。

男 小学校の頃、大の仲良しで。家にも遊びに行った何回も。
女 あの家？

男 けど中学生になってクラスも離れて、ほらむかしは中学校人いっぱいいたから、隣の小学校からいっしょになって、一学年で9組ともなくなくて。
女 お義父さんも来るってよ。

男 え大丈夫か。
女 (後ろを振り返って)ほら。
男 おーい！ おじいちゃんとはら！ 一緒に。

子どもが駆けて戻ってくる。

男 (すれ違う息子に)おじいちゃんのボールとか持ってやって。
女 ……大丈夫かな。

女も子どもを追って戻る。
男はカタフチくんの家を見る。すると玄関の扉が開いた。

男 あ……。

【了】

〈上演許可申請先〉下鴨車窓 hello@mogamos.link